

# 瀬織津姫伝説



むかしむかし(養老2年・718年)多賀城に大野東人(おおのあずまん)という鎮守府将軍(ちんじゆふしやうぐん)がおいました。将軍の仕事は、中央政権に従わなかった蝦夷(えぞ)の人達を征伐(せいぱつ)することでした。しかし蝦夷の人達はとても強く簡単に征服することはできませんでした。そこで神様に頼るしかないと考え、元正天皇(げんしょうてんのう)に紀州熊野(きしゅうくまの)の神様をこの地に迎えてほしいのすがと願い出ました。天皇はその願いを受け入れてくださり、紀州の国の県主(あかたぬし)「鈴木左衛門尉穂積重義(すずきさえもんいほつみしげよし)」という人に熊野の神様の分霊(ぶんれい)を東北の地に祀(まつ)らせるように命じました。

鈴木左衛門尉穂積重義は、家臣(かしん)数百人を従(したが)え、船団(せんたん)を組んで紀州(きしゅう)から北に向かいました。そのときお連れした熊野の神様の分霊をお祀(まつ)りするため、その場所を大祓(おおはら)い清めたのが瀬織津姫(せおりつひめ)であると伝えられているようです。

船団は5ヶ月かかって、ある港に到着しました。その港が唐桑村細浦(ぼそうら)、現在の唐桑町鮪立(しびたち)であり、その時、仮のお宮を建て熊野本宮神を安置(あんち)したのが唐桑町舞根(もうね)だそうです。現在も着岸第一歩の鮪立には業除(ごうのけ)神社が、舞根には瀬織津姫神社、その側に熊野神社が祀(まつ)られています。

鎮守府大野東人将軍は、郷主(ごうしゅ)たちを招集(しょうしゅう)して神輿(みこし)を出迎え、天皇からの手紙を受けとった後、何処(どこ)に神様を奉(まつ)ったらいいか神様の意見を伺(うかが)ったところ「磐井郡鬼首山(いわいぐんおにかべやま)(室根山)の峰がいい」というお告げがあったので、鈴木家の家臣の人達と白馬(あらうま)17頭に乘った郷主たちに守られながら出発し、途中の新城、折壁などで粥(かゆ)を献上(けんじやう)され、室根山に向かったという説があります。室根では熊野の神様をお迎えしたという古例(これい)に従い、室根大祭を4年に1度閏年(うるうとし)の翌年行っており、今年がその年になっています。

このほかにも瀬織津姫にはいろいろな言い伝えがあるそうですが、共通して言われている「瀬」は川、「織」は曲がっている、「津」は海、を意味し、厄災(わざわい)を川から海に流し海深くに鎮(しず)めてくれる大祓(おおはら)いの神様であった、というところに着目(ちやくもく)し、現代の不安や不景気を全て祓(はら)って流してもらいたいと願い、また来年3月の唐桑町との合併を歓迎する意味で、唐桑に縁(ゆかり)のある「瀬織津姫パレード」で今年は参加致しました。

祝 唐桑・気仙沼合併 祝 第55回気仙沼みなとまつり  
新気仙沼市の繁栄を心からお祈り申し上げます。

株式会社気仙沼商会

